

神奈川の自然シリーズ 9 神奈川の植物群落

田中徳久 (学芸員)

神奈川の植物群落

神奈川には、3,000種を超える維管束植物(シダ植物と種子植物)が生育しています。これらの植物は、東京湾や相模湾に面する海岸から、海拔1,000mを超える丹沢や箱根の山地まで、それぞれの環境に適合した多様な植物群落を構成しています。その分布は、気温や降水量などの気候的な要因を第一として、地形や地質、微気象などの土地的要因により決定されます。

照葉樹林とブナ林

ある気候条件下で平衡状態に達した植物群落を“気候的極相群落”と呼び、神奈川では、タブノキやスダジイ、シラカシなどを主体とした暖温帯の常緑広葉樹林(照葉樹林)と、ブナを主体とした冷温帯の落葉広葉樹林をみることができます。照葉樹林は、寒さの指数(月平均気温が5℃より低い月の平均気温との差の積算値にマイナスをつけたもの)−15°以上の地域に分布し、ブナ林は、温かさの指数(月平均気温が5℃より高い月の平均気温との差の積算値)85°以下の地域に分布するといわれます。神奈川では、計算上、700~800m付近がその境界となります。

神奈川の照葉樹林は、その大部分が、宅地や耕作地として開発されたり、クヌギ・コナラの雑木林やスギ・ヒノキの植林に変えられてしまいました。現在では、“鎮守の森”と呼ばれる社寺林や、急傾斜地に残された斜面林などで、その断片的な姿をみるこ

とができるに過ぎません。

神奈川のブナ林は、丹沢や箱根でみることができ、タテヤマギクやイヌヤマハッカ、マメザクラなどのフォッサ・マグナ要素と呼ばれる植物群を多く含むことで特異な存在です(写真1)。しかし、大気汚染(酸性雨や酸性霧も含む)によるブナの枯死やササの衰退、シカの食害、乾燥化による林床植物の構成種の変化など、さまざまな課題を抱えています。

ハコネコメツツジとカワラノギク

土地的要因により、気候的極相群落とは異なる平衡状態にある植物群落を“土地的極相群落”と呼び、さまざまな立地に、多くの植物群落をみることができます。丹沢や箱根の、強風のために森林が発達できない山頂や稜線付近に成立している風衝草原などはその代表で、そこに生育するハコネコメツツジは、神奈川を代表する名花です。しかし、このハコネコメツツジも、他の多くの植物とともに、園芸目的の採取により消失の危機にさらされています。信じがたいことに、国立公園内においても盗掘が行なわれ、現在でも掘跡をみかけることがあります(写真2・3)。

また、他の土地的極相群落についても、今まで平衡状態にあった環境に対する改変が、その植物群落を脅かしている例があります。相模川などの河川敷には、“極相群落”としては捉えにくい面もありますが、カワラノギクやカ



写真4. 伐採と萌芽を繰り返して根上がりしたクヌギ。

ワラハハコ、カワラヨモギなどを構成種とする植物群落が、定期的に繰り返される洪水により維持されてきました。しかし、ダムの建設により隣の供給が少なくなり、近年の管理型の治水施策により、堰堤や堤防等が整備され、洪水が起きにくくなりました。そのため、洪水による攪乱によって維持されてきた河原の植物たちは大きなダメージを受けています。さらに、帰化植物の繁茂や、4WD車やオフロードバイクによる踏圧、パーベキューなどのアウトドアライフを楽しむ人たちの影響なども大きな問題です。

人の力を必要とする雑木林

一方、人の力を必要とする植物群落もあります。里山に広がる雑木林は、薪や炭、堆肥のための落葉を採取する場所として、定期的な伐採や落葉掻きなど、人が管理することにより、その姿が維持されてきました(写真4)。しかし、近年では、生活様式の変化から、薪や炭の需要がなくなり、堆肥も用いられなくなりました。その結果、雑木林は放置され、アズマネザサなどが密生し、昔日の面影はありません。また、箱根仙石原に広がるススキ草原も、火入れなどにより、草原が森林へと移り変わっていくのを抑え、人の手により管理してきたものです。これらの人の力を必要とする植物群落も、神奈川の貴重な植物群落として、人の生活と密着したその姿を維持しつづけていく必要があるのではないのでしょうか。



写真1. 初夏の丹沢堂平のブナ林。



写真2. 1994年撮影。



写真3. 1996年撮影。

写真2のハコネコメツツジの大きな株と写真3のコケに縁取られた岩の露出した白い部分の形に注意して下さい。